JRFU
Japan Freight Railway Union Tohoku Young
No. 7
October 12, 2026
Publisher T. Okubo

大阪・神戸平和フィールドワークに参加！

10月6日から7日に、中央本部主催の「大阪・神戸平和フィールドワーク」に、東北地本青年部から大久保事務長が参加しました。

1日目は、反戦・平和や人権問題をテーマに発行されている「新聞うずみ火」の編集者、矢野　宏さんの案内のもと、京橋駅爆撃被災者慰霊碑から大阪国際平和センター（ピースおおさか）まで踏査しました。

⇐大阪砲兵工廠・旧化学分析場

大阪砲兵工廠（旧日本軍の兵器の製造を担ったアジア最大規模の軍事工場）の数少ない遺構の一つで、1919年（大正8年）に完成。設計者は、当時陸軍の技師として第四師団司令部庁舎や大阪砲兵工廠関係施設の設計に携わった建築家の置　塩章（おしお・あきら、1881～1968）。赤レンガを用いたネオ・ルネサンス風の地　上2階、地下1階の建物で、兵器の研究開発や化学実験が行われたとみられる。空襲による破壊をまぬがれ、戦後は国の庁舎、大阪大学工学部の校舎、自衛隊の庁舎として1987年まで使われた。

山里丸石垣の機銃掃射跡⇒

大阪城天守閣の北側に位置する「山里丸」の石垣の表面に破損した痕跡がある。第二次大戦末期の空襲による機銃掃射でついたものと推定される。アメリカ軍の戦闘機P51ムスタング　（硫黄島から飛来）やグラマンF6Fヘルキャット（空母の艦上機）が、地上の人影を見ると乱射した。昭和20年（1945）3月から終戦前日の8月14日まで、大阪は8度におよぶ大空襲を受け、陸軍の中枢機関や軍事工場があった大阪城も標的となった。「山里丸」ではこのほかにも爆弾によって南側石垣上部が吹き飛ばされ、　北側内堀に面した石垣も数か所ひずんだが、現在はいずれも修復されている。

2日目は、神戸市にある「戦没した船と海員の資料館」を見学しました。1941年12月から1945年8月までの戦争において、船舶（軍艦を除く）と運航に携わる多くの方が国家の管理下となり、戦場に赴かされました。その結果、7,000隻を超える商船が沈没し、犠牲者は60,000人を超えました。

この資料館は、戦没商船の記録や戦没された船員を顕彰し、「海員不戦の誓い」として後世に伝える場として、元海員組合本部会館であったこの地に2000年8月に開設されました。

戦没船員の年齢別分布

年　齢	人　数	比　率	年　齢	人　数	比　率
14	987	1.63	20以上30未満	16,601	27.39
15	2,865	4.73	30以上40未満	13,188	21.76
16	3,182	5.25	40以上50未満	8,533	14.08
17	3,966	6.54	50以上	3,235	5.34
18	4,204	6.94			
19	3,842	6.34			
20未満小計	19,046	31.43	合　計	60,603	100%

（註：人数には推定を含む）

⇐年少者が目立つ戦没船員

表は死亡時の年齢別分布である。年少者がひときわ目立っている。この背景には、海員養成所、商船学校、高等商船など、海員の養成機関がいずれも「戦時特例」でその養成期間が大幅に短縮され、年少の人たちが徴用船などに乗船し戦没したことにある。特に14歳で戦没した人たちは、尋常高等小学校（高等科2年）を卒業し海員養成所に入学、2ヵ月の短期養成で卒業し乗船後間もなく戦没された人たちである。

1日目には懇親会も開かれ、各地の組合員との交流が盛大に行われました。矢野さんの挨拶では、「*騙されたらあかん。忘れてもあかん。諦めたらあかん。*」と、情報が溢れて何が真実か見えにくくなっている現代において、物事の本質を見極めることの大切さ、戦禍を風化させず、平和を守るための歩みを決して止めないという決意が込められた、重みのある言葉をいただきました。

私たちは「平和なくして労働運動なし」という認識のもと、いかに現実味を持って、反戦・平和を求め続けるかをこれからも考えなければなりません。